ソグディアナの都市を探る
—ウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡発掘調査(2022年度)—

村上　智見　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター特任助教
ベグマトフ・アリシェル　ニューヨーク大学客員研究員
サンディボエフ・アリシェル　サマルカンド考古学研究所研究員
フジャモフ・サナット　サマルカンド考古学研究所研究員
マハマディエフ・ガイラット　サマルカンド国立大学博士後期課程
アルジエフ・コミルジョン　サマルカンド考古学研究所研究員
宇野　隆夫　帝塚山大学客員教授
寺村　裕史　国立民族学博物館准教授

Excavations at Kurgon-Tepa in Uzbekistan (2022): Investigating of Cities in Sogdiana

MURAKAMI, Tomomi　Assistant Professor, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
BEGMATOV, Alisher　Visiting Research Scholar, New York University
SANDIBOEV, Alisher　Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology
HUJAMOV, Sanat　Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology
MAHAMADIEV, Gayrat　PhD candidate, Samarkand State University
ARZIEV, Komiljon　Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology
UNO, Takao　Visiting Professor, Tezukayama University
TERAMURA, Hirofumi　Associate Professor, National Museum of Ethnology

1. はじめに

今年度から始まったウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡発掘調査は、ソグディアナ都市の調査からソグド人の歴史と文化を明らかにすることを目的として実施した。本遺跡を調査対象に選定した理由は次の点にある。一つ目は、クルゴン・テパ遺跡を保護し記録するためである。ウズベキスタンでは近年の人口増加に伴い土地の需要が増え、これまで以上に遺跡破壊が懸念される現状にある。クルゴン・テパ遺跡はシタデルとシャフリスタンの一部が良好な状態で残存していたが、近年になって発掘調査を経ずに、違法に遺跡上に建物が建てられる事態が起こり、今後も無計画に遺跡の開発が行われる恐れがあるため、破壊される前に遺跡を記録すると共に、発掘調査を行うことで抑止力とし、遺跡を保護しようと計画した。また、農業用水の浸食により遺構が破壊されている様子も確認できたことから、今年度は破壊部分の調査と記録を中心に実施することになった。

二つ目は、当該遺跡がソグディアナにおける主要都市の一つであるクルドル・テパ遺跡の衛星都市的位置にあり、ソグド都市の様相と幹線道路の復元を考える上で重要な遺跡であること、またクルゴン・テパ遺跡の一部が史料にみられるサンジャルファグン寺院に比定されていることから、発掘調査によりこの遺跡の性格を明らかにしたいと考えた。

2. 遺跡の概要

クルゴン・テパ遺跡(39° 26′ 57N 67° 08′ 59E)はウズベキスタン共和国サマルカンド市(アフラシアブ遺跡)の約30 km南東、ウルグット地区エションラヴォット村に位置している。現存する遺跡の範囲は主にシタデル(約50×50 m)と、それを囲むシャフリスタンの一部、さらにシタデルの西ないし西南部に残存する現在墓地として利用されている4か所である(**図1**)。発掘調査に先立って4か所の墓地を踏査した結果、墓穴を掘削する際に出土し放棄された多くの土器片を表採した。これらはクルゴン・テパ遺跡のシャフリスタンまたはラバットを成していたものと考えられる。西南部に位置する最も小さい墓地は「ザンジルバグ」と呼ばれており、アラビア語史料にみられる「サンジャルファグン」ないし中世後期のワクフ関連書類にみられる「サンジャルフィガニ」に比定されている(Vyatkin 1902, p. 38; Sandiboev 2021, p. 13)。この説

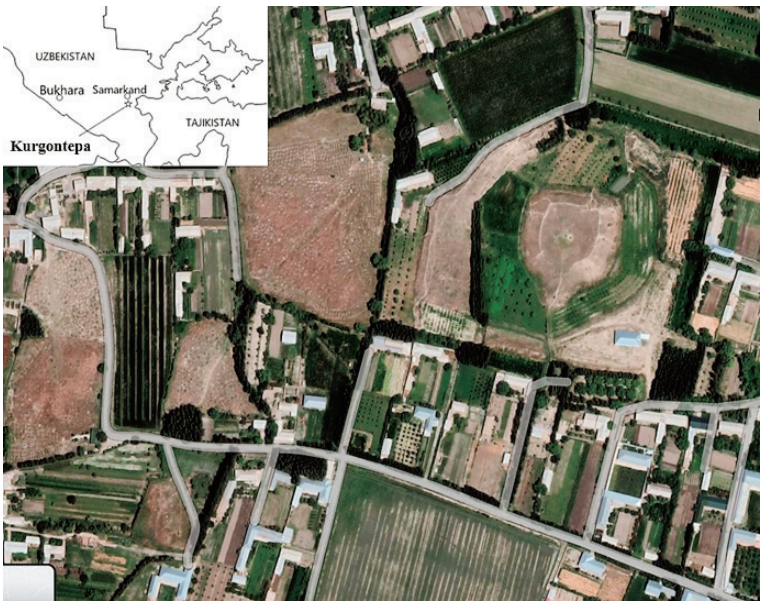

図１　クルゴン・テパ遺跡の位置と遺跡の全景

図２　トレンチ１発掘の様子

が正しければ、サンジャルファグンの「ファグン」はソグド語で寺院を意味することから、当該遺跡は寺院であったか、あるいはこの遺跡領域内に重要な寺院があった可能性が考えられる。当該遺跡ではこれまで発掘調査が行われたことはなく、この遺跡がどのような性格を持つものか、史書の記述以外に全く情報が無い状態からの調査となった。

3. トレンチ１

シタデルを囲むシャフリスタンの西側面の一部は農業用水によって浸食されており、ソグド期の遺構が一部露出していた。この場所に幅５×6.5 m のトレンチを設け発掘調査を行った結果、日干しレンガによって建てられた部屋が検出され、さらに二つの時期にこの建物が築造されたことが明らかになった。第一段階は、出土土器片やレンガなどから７〜８世紀に築造されたと推定され、トレンチ内からは 2.25×1.7 m の部屋、および幅約 1.5 m の回廊が検出された。部屋の西壁は保存されておらず、南壁に回廊へと続く幅１m の出入り口が検出された。部屋の壁の厚さは約１m であり、日干しレンガ（50×30×7〜8 cm）からなっている。なお、回廊の壁も日干しレンガ（50×30×8 cm）積みにより作られており、それぞれのレンガは厚さ約 2 cm の粘土で接着されていた。さらに部屋の北東角にスファ（0.9 m×8 cm）が検出された（**図２**）。

第２段階は、出土土器片などから 11〜12 世紀頃に築造されたと推定された。トレンチの南に東西に走る狭い回廊が検出され、壁はパフサブロックからなって

いた(図2)。回廊の北西側に9個の日干し煉瓦(30〜31×17×6.5〜7 cm)を縦積みにして作られたスファが検出された。また、床面からは砥石などの遺物が出土した。

4. トレンチ2・3

シタデルを囲むシャフリスタン部の北西では、風雨により干しレンガが露出している状態にあり、アーチ型に組まれたレンガがいくつも確認できたことから、この構造を確認するために長さ12 mを超えるトレンチ2を設置し調査を実施した。その結果、アーチ型屋根を持つ部屋がいくつも連続して隣接していることが明らかになった(**図3**)。これまでのところ6つの部屋が確認され、それぞれの幅は約2〜2.55 m、高さは主に3 m前後であった。これはソグド古代末期・中世早期の他の遺跡にも見られる建築である(図3)。トレンチの最南に位置する部屋6よりさらに南側にもアーチ屋根を持つ部屋が連続していることが明らかになったことから、来年度以降はこれらの部屋がどこまで連続するのかを確認する予定である。北側から順番に、部屋1〜6の詳細は次のとおりである。

A. 部屋1

部屋の規格は幅約2.1 m、高さ約2.8 mである。床面から約1.2 mのところに厚さ約2 cmの粘土混合物を使用し、水平に敷かれた2列の日干しレンガの土台を置いて、この上にレンガを徐々に内側に寄せてアーチ型屋根を形成している。部屋の北壁は粘土と日干し煉瓦でなっており、南壁はパフサブロックと日干しレンガを組み合わせて作られている。部屋の床には7列の日干し煉瓦(45〜50×25〜26×8〜9 cm)が積まれ入り口が封鎖されていた。

B. 部屋2

部屋1の南に、共有の壁を挟んで隣接する。幅約2.3 m程度、高さ約2.9 mである。この部屋のアーチよりも上部からは、1.3×0.57 mのパフサブロックが検出された。これは後の時代の建築である。

C. 部屋3

幅約2.25 m、高さ約3.1 m、アーチ屋根の土台は床面から1.29 mの位置にある。部屋の壁の表面には、藁を含む粘土の漆喰(暑さ約4〜5 cm)が確認された。さらに幅84 cm高さ21 cmのスファが検出された。

D. 部屋4

幅約2 m、高さは約3.13 mである。日干しレンガから成るアーチ屋根の土台は、床面より約1.25 mの高さから始まる。

図3 トレンチ2. 連続するアーチ型屋根の部屋

E. 部屋5

幅約2.55 m、残存する高さは約2.7 mである。アーチ屋根の土台は床面から約1.04 mの高さにあり、ドームを形成する日干しレンガのサイズは50×27〜28×8〜9 cmである。

F. 部屋6

幅約2.05 m、残存する高さは約2.52 mである。アーチ屋根の土台は床面から約1.13 mの高さにある。アーチは他の部屋と同様に、日干しレンガ(50×26〜27×8〜10 cm)で作られている。部屋の幅は約1.73 mと他の部屋よりも狭くなっており、後に壁を修復したことによるものを考えられる。

トレンチ1と同様、トレンチ2においても主に二つの建築段階が確認された。出土土器片などの遺物を基に、最初の段階は7〜8世紀頃、第2段階は11〜12世紀頃と推定された。

トレンチ1の北側に設置したトレンチ3の発掘調査の結果、トレンチ2で見られたアーチ型構造と同構造のアーチ屋根を持つ部屋が検出された。幅約2.5 m、残存する高さは約2.5 mである。アーチを形成する日干しレンガの寸法は50×28〜30×9〜10 cmであり、トレンチ2のレンガとおよそ同規格である。トレンチ2と同様のアーチ屋根構造がトレンチ3でも検出されたことで、シタデルを取り囲む建築物は、およそ全体がアーチ構造である可能性が示唆された。今後さらに調査を進め、全体像を明らかにしたい。

5. 遺物

本調査では大量の土器片、貨幣、骨などが出土した。現在クリーニングおよび記録作業を行っているところである。これまでに確認された土器の年代は、主に7〜12世紀のものである。動物骨は125点出土し、これまでにヤギ亜科(羊 Ovis aries；山羊 Capra hircus)、牛(Bos taurus)とロバ(Equus asinus)が確認された。また一点のみノロジカ(Capreolus sp.)を確認している。

さらに調査期間中、地元の人々によって遺跡付近か

図４　壺と貨幣

図５　オイルランプ

図６　ブハルフダットの貨幣

ら採集した遺物が寄贈された。これらは遺跡の破壊部分より見つかったものであり、保存状態の良い陶器のオイルランプ、貨幣が入れられた装飾壺は特筆すべき遺物である（**図４、５**）。赤色顔料で装飾された壺には銀貨87点が入っており、クリーニングを行った、調査の結果、全てブハルフダットの貨幣であり、６種類が確認された（**図６**）。主に８〜９世紀頃と推定される。

６．まとめ

クルゴン・テパ遺跡において初となる発掘調査の結果、当該遺跡は７〜８世紀、11〜12世紀ごろに利用されていたことが明らかになった。また、想定より遺跡の範囲が広く、比較的大きな都市を形成していたことが考えられた。来年度以降の調査ではシタデル部分も発掘し、この遺跡の構造および用途について明らかにしたい。

また、今回の発掘調査では、小・中学校や大学生、地元の人々らを対象に積極的に現地説明会を実施し、調査によって明らかになった遺構と出土遺物について解説するなど、遺跡の重要性を訴える機会を設けた。大きな理解と興味が寄せられたことは重要な成果の一つであり、今後遺跡の保存に繋がることが期待される。

※本研究はJSPS科研費、19K13397の助成を受けた成果の一部である。

■参考文献

・Вяткин В. Л. 1902 Материалы к исторической географии Самаркандского вилайета // *Справочная книжка Самаркандской области*. Вып. 7. Самарканд.
・Сандибоев А. Н. 2021 *Илк ўрт асрларда Маймурғ*. Тошкент.